

【復活のトロパリ 第1調】

きゅう うせ いしゅよ、イウデヤのひとはかを
救世 主 ひとはかを

ふうじて、へいそつなんぢのいさぎよきみを
封 兵 卒 爾 潔 躯

まもるとき、なんぢはみつかめにふくか
守 時 爾 三日目 復活

して、せかいにいのちをたまえり。
世界 生命 賜

ゆえにてんぐんはなんぢいのちをほどこすの
故 天軍 爾 生命

しゆによべり、ハリストスよ、こうえいは
主 呼 光榮

なんぢのふくかつにきし、こううえいはなんぢ
爾 復活 歸 命

のくににき歸す、ひとりひとをいつくしむ
國 歸 獨 人 慈

しゆよ、こうえいはなんぢのおもんばかりに
主 光榮 爾 處

き歸す。

【生神女進堂祭のトロパリ 第4調】

こんにちかみのめぐみはしめされ、ひ人
今日 神 恩恵 示

とびとのすくいはつたえらる。どうてい
人 救 傳 童 貞

ぢよはあきらかにかみのでんにあらわ
女 明 神 殿 現 れて、

あらかじめハリストスをしゅうじんにしらしむ。
預 衆 人 知

われらもこえをあげてか彼
我 等 聲 揚 れによばん。ぞう
ぶつしゅのおもんぱかりとじょうじゅなるもの
物 主 惑 成 就 者 よ、

よろこべよ。
慶

【 日本の亜使徒聖ニコライのトロパリ 第4調 】

しととひとしくどうざなるもの、ちゅう
使徒 等 同 座 者 忠

じつにしてしんちなるハリストスのえきしゃ、せい
實 神智 役 者 聖

なるしんにえらばれたるふえ、ハリストスのあい
神 撲 笛 愛

にみちたるうつわ、わがくにのこう
満 器 我 國 光

しょ うしゃ あしとしゅきょうせいいニコライ
照 者 亜使徒主教聖

よ、なんぢのぼくぐんのた爲め、および
爾羊群爲及

ぜんせかいのために、いのち命をた賜もうせい
全世界爲及

さんしゃにいのりたまえ。
三者 祈 給

【 日本の亞使徒聖ニコライのコンダク 第4調 】

せいせいしやあしとせいニコライよ、わが
成聖者亞使徒聖

くになんぢをたびびとおよびいほうじんとうけ
國爾旅人及異邦人受

しに、なんぢははじめわがくににおいておの
爾初我國於己

れをがいらいしやとしりたれども、ハリストの
外來者知

ひかりとあたたかきをながし、なんぢのて
光暖流爾敵

きをぞくしんのことな
屬神子爲

し、かれらにか
等神

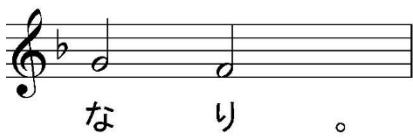
みのおんちょうをあたえ、ハリストのきょうか
恩寵與教會をたて
建

たり、いまこのきょうか
今此教會ためにいのり
のり

たまえ、けだしわれらそのしょしはなん
給蓋我等其諸子爾
ちによぶ、わがよきぼくしゃよ、よろこ
べよ。

【 生神女進堂祭のコンダク 第4調 】

こうえいはちちとこ子とせいしんにき 归す、
きゆうせいしゆのいときよ きで殿ん、いたりて
救世主最淨 至
とうときみや、かみのこうえいのせいに
貢きみや、かみの光榮
せられしほうぞうたるどうていぢよ は
こんにちしゆのいえにいれられて、せいしんのおんちょ
今日主家入
うをともにいらしむ。かみのつかいら等
はかれをうたいいていふ、これてんのまく
はかれをうたいいていふ、これてんのまく



【復活のコンダク 第1調】

なり。

いまもいつもよよに、アミン

今何時世世に、アミン

しゅさいよ、なんちはかみなるによりてこう
主宰爾は神因光

えいのうちには墓かよりふくかつし、せ世
榮中墓より復活

かいをもともにふくかつせしめたまえり。
界偕復活

ひとのせいはなんちをかみとしてほめう
人性爾神讃歌

たい、しはほろぼされ、アダムはたのし
死滅

み、エヴァはいまなわめよりとかれ
今縛釋

てよろこびてよぶ、バストスよ、なんち
觀呼爾

はしゅうじんにふくかつをたもうしゅなり。
衆人に復活賜主

司祭) (黙誦: 聖なる神、聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、
ヘルヴィムより讃榮せられ、悉くの天軍より伏拜せられ、萬物を無より有

ひと なんぢ ぞう しょう よ つく なんぢ もろもろ たまもの もつ これ かざ
 となし、人を爾の像と肖とに依りて造り、爾が諸の賜を以て之を飾
 ねが もの ちえ めいご あた つみ おこな もの す そのすくい ため
 り、願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行う者を棄てずして、其救の爲に
 つうかい た われらいや ふとう なんぢ しょぼく こ とき おい なんぢ
 痛悔を立て、我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が
 せい さいだん こうえい まえ た なんぢ とうぜん ふくはいさんえい たてまつ た
 聖なる祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拜讚榮を奉るに堪うる
 もの しゅさい なんぢみづか われらざいにん くち せいさん うた う なんぢ
 者となしし主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の
 じんじ もつ われら のぞ われら およ じゅう じゅう つみ ゆる わ たましい
 仁慈を以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が靈
 からだ せい われら しょうがいぜんこう もつ なんぢ つと え たま せい
 と體とを聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖
 なる生神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、)

司祭) けだしわ かみ なんぢ せい われらこうえい なんぢちち こ せいしん けん いま いつ よよ
 蓋我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世
 に、



【聖三祝文】

せいなる神み、せいなるゆうき、せいなる
 聖 神 勇毅 聖

じょうせいのものよ、われら等をあわれめ
 常 生 者 我 等 懈

よ。せいなる神み、せいなるゆうき、せい
 聖 神 勇毅 聖

なるじょうせいのものよ、われら等をあわれ
 常 生 者 我 等 懈

め よ。せいなる神み、せいなるゆうき、
 聖 神 勇毅

せいなるじょうせいのものよ、われら等をあわ
 聖常生者我等をあわ憐
 れめよ。こうえいはちちとことせいしん神
 にきす、いまもいつもよよに、アミン。
 归今何時世世
 せいなるじょうせいのものよ、われら等をあわ
 聖常生者我等をあわ憐
 れめよ。せいなるかみ、せいなるゆう勇
 聖神聖勇
 き、せいなるじょうせいのものよ、われら等を
 聖常生者我等を
 あわれめよ。
 憐

司祭) (黙誦: しゅなよきものあがほざるものなんちそのくに
 主の名に依りて來たる者は崇め讚めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國
 の光榮の寶座に在りて恒に崇め讚めらる、今も何時も世世に、)

【 プロキメン
 提綱 主日第1調 及び生神女の歌第3調 】

司祭) つつしきみて聽くべし、衆人に平安、

誦經) なんちしんの神にも、

司祭) えいち睿智、

誦經) プロキメン、主よ、我等爾を頼むが如く、爾の憐を我等に垂れ給え、

しゅよ、われらなんちをたのむがごとく、
 主我等爾を頼

なんちのあわれ みをわれらにたれたま
爾 憐 我 等 等 垂 給
え 。

誦經) 義人よ、主の爲に喜べ、讃榮するは義者に適う、

しゆよ、われらなんちをたのむがごとく、
主 我 等 等 稈 如
なんちのあわれ みをわれらにたれたま
爾 憐 我 等 垂 給
え 。

誦經) 我がたましいしゆあがわしづかみわきゆうしゆよろこ
我が靈は主を崇め、我が神は神我が救主を悦べり。

わがたましいはしゆをあがめ、わがしんは
我 靈 主 崇 、我 神
かみわがきゆうしゆをよろこべり。
神 我 救 主 悅 。

【アポストロス
使徒經 229 端 エフェス書5章9節～19節 及び320 端 エウレイ書9章1～7節】

司祭) 睿智、

誦經) 聖使徒パヴエルがエフェス人に達する書の讀、

司祭) 謹みて聽くべし、

誦經) 兄弟よ、光の子の如く行え。蓋神の實は凡の慈愛と公義と眞實とに在り。爾

らかみよろこところなに つまびらか み むす くらやみ おこない あづか なか
等神の悦ぶ所の何なるを審にせよ、實を結ばざる暗昧の行に與る勿れ、

むしろこれせ けだしかれら ひそか おこな こと い または べ およ せ こと
甯之を責めよ。蓋彼等が隠に行う事は、言うも亦耻づ可し。凡そ責めらるる事は

ひかり よ あらわ けだしおよ あらわ こと ひかり ゆえ い ものの
光 に由りて 顯 る、 蓋 凡そ 顯 る事は 光 なり。故に云えるあり、寐ぬる者起きよ、
し ふくかつ なんぢ てら ここ もつ み おこない つつし むち もの ごと
死より復 活せよ、ハリストス 爾 を照さん。是を以て視よ、 行 を慎みて無智の者の如
くせず、 すなわちち もの ごと とき おし ひ あ こ ゆえ しりよ
乃 智ある者の如くせよ、時を惜むべし、日は惡しけらばなり。是の故に思慮なき
もの な なか すなわちかみ むね なに さと またさけ よ なか こ よ ほうとう
者と爲る勿れ、 乃 神の旨の何なるを覺れ。又 酒に酔う勿れ、此れに由りて放蕩あり、
すなわちしん み せいせい かしょう ぞくしん しふ もつ くち とな こころ わ
乃 神に満てられよ。聖詠と歌頌と屬神の詩賦とを以て、口に唱え、心に和して、
しゅ さんび
主を讃美せよ。

(比較用 口語訳) 光の子らしく歩きなさい——光はあらゆる善意と正義と真実との実を結ばせるものである——主に喜ばれるものがなんであるかを、わきまえ知りなさい。実を結ばないやみのわざに加わらないで、むしろ、それを指摘してやりなさい。彼らが隠れて行っていることは、口にするだけでも恥ずかしい事である。しかし、光にさらされる時、すべてのものは、明らかになる。明らかにされたものは皆、光となるのである。だから、こう書いてある、「眠っている者よ、起きなさい。死人のなかから、立ち上がりなさい。そうすれば、キリストがあなたを照すであろう」。そこで、あなたがたの歩きかたによく注意して、賢くない者のようにではなく、賢い者のように歩き、今の時を生かして用いなさい。今は悪い時代なのである。だから、愚かな者にならないで、主の御旨がなんであるかを悟りなさい。酒に酔ってはいけない。それは乱行のもとである。むしろ御靈に満たされて、詩とさんびと靈の歌とをもって語り合い、主にむかって心からさんびの歌をうたいなさい。

誦經 けいでい だいいち やく ほうじ れい ち ぞく せいしょ けだしだいいち まく もう
兄弟よ、第一の約には奉事の例と地に屬する聖所とありき。蓋 第一の幕は設けら
れて、其内に燈臺と、案と、供前の餅とありき、是を聖所と稱す。第二の帷の
うしろ しせいじょ しよう まく ここ きん こうろ あまね きん おお やくひつ
後に至聖所と稱する幕ありき。茲には金の香爐と、偏く金を蔽いたる約匱とあり、
そのうち おさ きん つぼ きざ つえ およ やく ひ そのうえ しょくざい
其内にマンナを藏めたる金の壺、アアロンの萌せる杖、及び約の碑あり、其上に贖罪
しょ おお こうえい これら こと いまつまびらか い もち これら ものか
所を覆える光榮のヘルヴィムありき。此等の事は今 詳に言うを庸はず。此等の物斯
く備わりて、第一の幕には司祭等恒に入りて、奉事を行い、第二の幕には獨司祭長
のみ、一年に一次、血を攜えざるなくして入り、之を己の爲及び民の愆の爲に獻
す。

(比較用 口語訳) 兄弟たちよ。初めの契約にも、礼拝についてのさまざまな規定と、地上の聖所とがあつた。すなわち、まず幕屋が設けられ、その前の場所には燭台と机と供えのパンとが置かれていた。これが、聖所と呼ばれた。また第二の幕の後に、別の場所があり、それは至聖所と呼ばれた。そこには

金の香壇と全面金でおおわられた契約の箱とが置かれ、その中にはマナのはいっている金のつぼと、芽を出したアロンのつえと、契約の石板とが入れてあり、箱の上には栄光に輝くケルビムがあつて、贖罪所をおおっていた。これらのことについては、今ここで、いちいち述べることができない。これらのものが、以上のように整えられた上で、祭司たちは常に幕屋の前の場所にはいって礼拝をするのであるが、幕屋の奥には大祭司が年に一度だけはいるのであり、しかも自分自身と民とのあやまちのためにささげる血をたずさえないで行くことはない。

【 アリルイヤ 主日第1調 及び生神女進堂祭の第8調 】

司祭) なんぢ へいあん
爾 に 平 安 、

誦經) なんぢ しん
爾 の 神 に も 、

司祭) えいち
睿 智 、

誦經) アリルイヤ、願わくは我が爲に仇を復し、我に諸民を従わしむる神は讃頌せられん、



誦經) おおい すくい おう ほどこ あわれみ なんぢ あぶら もの およ そのすえ よよに
大なる救を王に施し、憐を爾の膏つけられし者ダヴィド及び其裔に世世に

垂るる者よ、我爾の名に歌わん、



誦經) ちよ これ きき これ み なんぢ みみ かたぶ
女よ、之を聽き、之を觀、爾の耳を傾けよ、



司祭) (黙誦: ひと あい しゅさい わ こころ かみ し ちえ いさぎよ ひかり かがや わ しねん
 人の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福たる誠を畏るる
 おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ なんち よろこ ところ おも か おこな
 畏をも入れて、我等が悉くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜ぶ所を思い且つ行
 いて、屬神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋ハリストス神よ、爾は我が靈と體
 との光照なり、我等爾と爾の無原の父と至聖至善にして生命を施す爾の神とに
 光榮を獻ず、今も何時も世世に、アミン。)

【 エヴァンゲリオン
 福音經 ルカ福音書 71 端 12 章 16~21 節

及びルカ福音書 54 端 10 章 38~42 節、11 章 27~28 節】

司祭) 睿智、肅みて立て聖福音經を聽くべし、衆人に平安、



司祭) ルカ傳の聖福音經の讀、



司祭) 謹みて聽くべし、彼の時安息日にイイスス一の會堂に在りて教を宣べたり。爰に十

八年病の鬼を患うる婦あり、僵みて、少しも伸ぶ能わざりき。イイスス之を見て、呼び

て之に謂えり、婦よ、爾は其病より釋かれたり。乃手を彼に按せたれば、彼直に

の伸びて、神を讚榮せり。會堂の宰、イイススが安息日に醫を施ししを煊りて、民

に謂えり、工作を爲すべき日は六日あり、其中に來りて醫されよ、安息の日に於てせざれ。

しゆかれ こた い ぎぜんしや なんぢらおののスポット おい そのうしあるいは うさぎうま かいばぶね
 主彼に答えて曰えり、偽善者よ、爾等各安息日に於て其牛或は驢を槽

より解き、之を牽きて飲わざるか、況やアブラアムの女なる此の婦十八年サタナに

しば もの むすび スポット ひ おい と かれ これ い とき かれ てき
 縛られたる者の結を、安息の日に於て解くべからざりしか。彼が之を言う時、彼に敵す

もの みなは しゅうみん かれ およそ こうめい しわざ よろこ
る者は皆愧ぢ、衆 民は彼が凡 の光明なる行事を喜 べり。

(比較用 口語訳) イエスが安息日に、ある会堂で教えておられると、そこに十八年間も病気の靈につかれ、かがんだままで、からだを伸ばすことの全くできない女がいた。イエスはこの女を見て、呼びよせ、「女よ、あなたの病気はなおった」と言って、手をその上に置かれた。すると立ちどころに、そのからだがまっすぐになり、そして神をたたえはじめた。ところが会堂司は、イエスが安息日に病気をいやされたことを憤り、群衆にむかって言った、「働くべき日は六日ある。その間に、なおしてもらいたいなさい。安息日にはいけない」。主はこれに答えて言われた、「偽善者たちよ、あなたがたはだれでも、安息日であっても、自分の牛やろばを家畜小屋から解いて、水を飲ませに引き出してやるではないか。それなら、十八年間もサタンに縛られていた、アブラハムの娘であるこの女を、安息日であっても、その束縛から解いてやるべきではなかったか」。こう言われたので、イエスに反対していた人たちはみな恥じ入った。そして群衆はこぞって、イエスがなされたすべてのすばらしいみわざを見て喜んだ。

司祭) 彼の時、彼等が行ける時、イイスス 一 の村に入りしに、或 婦 マルファと名づくる者、

かれ そのいえ むか そのしまい な もの そくか ざ そのことは
彼を其 家に迎えたり。其姉妹にマリヤと名づくる者あり、イイススの足下に坐して、其 言

き きょうじ おお よ こころ わづら つ い しゅ わ しまい
を聽けり。マルファは 供 事の多きに因りて 心 を煩 わし、就きて曰えり、主よ、我が姉妹、

われひとり のこ きょうじ なんちい な これ めい われ たす
我一人を遺して 供 事せしむるを 爾 意と爲さざるか、之に命じて、我を助けしめよ。イイ

かれ こた い なんち おお こと おもんばかり こころ ろう
スス彼に答えて曰えり、マルファよ、マルファよ、 爾 は多くの事を 慮 りて 心 を勞せ

しか もと ところ ひとつ よ ぶん えら これ かれ うば べ
り、然れども需むる 所 は 一 のみ。マリヤは善き分を擇びたり、是は彼より奪 う可からず。

これ い とき ひとり おんなたみ うち こえ あ かれ い なんち はら はら なんち す
此を言う時、一 の 婦 民の中より聲を揚げて、彼に謂えり、爾 を孕みし腹と爾 が哺

いし乳とは 福 なり。彼は曰えり、然り、神の 言 を聽きて之を守る者は 福 なり。

(比較用 口語訳) イエスがある村へはいられた。するとマルタという名の女がイエスを家に迎え入れた。この女にマリヤという妹がいたが、主の足もとにすわって、御言に聞き入っていた。ところが、マルタは接待のことで忙がしくて心をとりみだし、イエスのところにきて言った、「主よ、妹がわたしだけに接待をさせているのを、なんともお思いになりませんか。わたしの手伝いをするように妹におっしゃってください」。主は答えて言われた、「マルタよ、マルタよ、あなたは多くのことに心を配って思いわずらっている。しかし、無くてならぬものは多くはない。いや、一つだけである。マリヤはその良い方を選んだのだ。そしてそれは、彼女から取り去ってはならないものである」。イエスがこう話しておられるとき、群衆の中からひとりの女が声を張りあげて言った、「あなたを宿した胎、あなたが吸われた乳房は、なんとめぐまれてのことでしょう」。しかしイエスは言われた、「いや、めぐまれてのこと、むしろ、神の言を聞いてそれを守る人たちである」。

しゅよ、こうえいはなんぢにき歸し、こうえい
主 光 荣 爾
はなんぢにき歸す。

※ 聖体礼儀③ (金口イオアン) へ